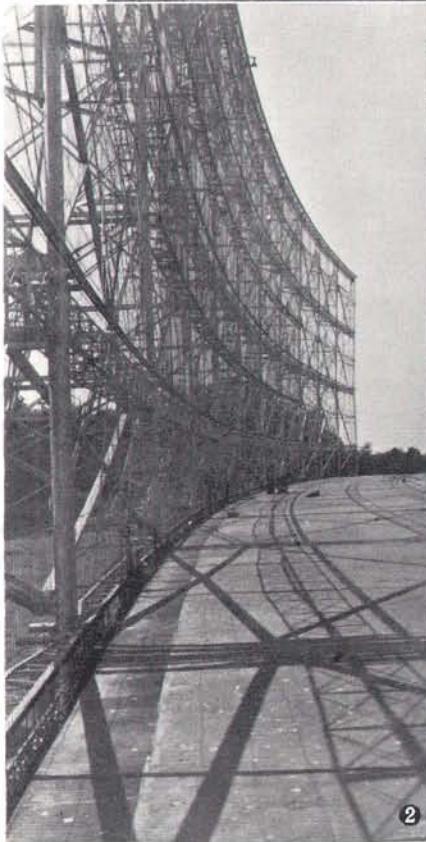
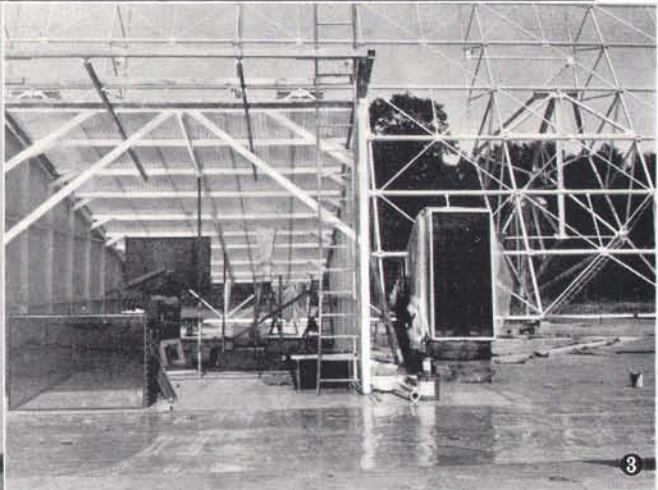


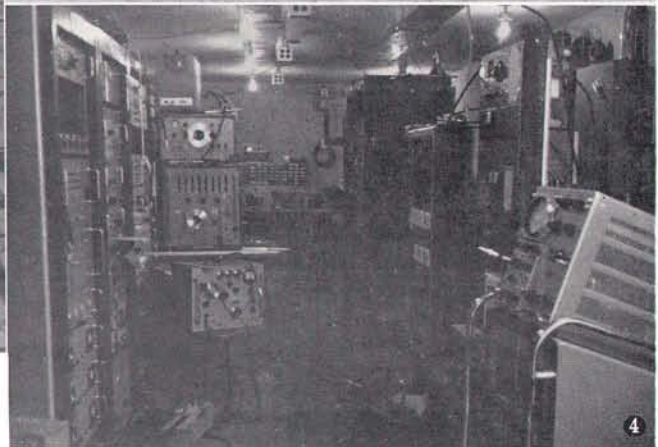
1



2



3



4

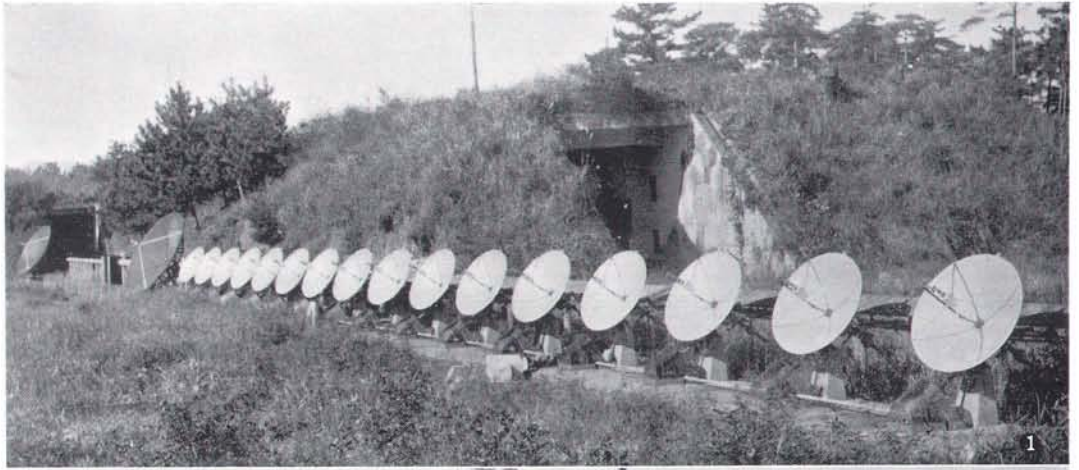
◇オハイオの電波望遠鏡

1 はアンテナ全景で、右が固定パラボラ、左は可動平面、2 は固定パラボラの

全景、3 は焦点におかれた1次輻射器群、左下は 600 Mc/s 電磁ホーン、その右上の木板は 600 Mc/s 用スカイアンテナの裏面（これはコーナーリフレクターである）、その右は 1400 Mc/s スカイホーン、一番右の大きいホーンは 1400 Mc/s 用でレンズ付である。

4 は地下観測室の内部、左側のラックは水素線用受信器、右側奥の高いラックは 600 Mc/s 受信器、その手前の低いラックが 1400 Mc/s パラメトリック増幅器、その手前は 1400 Mc/s の受信器である。

（土屋 淳氏の記事参照）



◇豊川の電波観測装置 愛知県豊川の名古屋大学空電研究所の天体電波観測器械のいろいろで、1は9400Mc/s 干渉計、ビーム幅は右側16素子で2.2分(角)、左側の3m パラボラ2個を加え複合干渉計とした場合0.7分、強度および偏波の太陽面上の分布を同時に測る。2は後列左から9400 Mc/s 用(直径1.2m)、3750 Mc/s (1.5m)、2000 Mc/s (2.2m)、1000 Mc/s (3 m)で、この4個は下の4、5、6、7、の写真に大きく示してある。前列は4000 Mc/s 8素子干渉計で、1954年に完成したもの。パラボラ反射鏡の上についているのは偏波格子(1/4波長板)。

3は銀河電波試験観測用10m パラボラ自家製で波長3cmまで使える。近くメーザー受信器をのせる予定。4は9400Mc/s用直径1.2mの太陽電波観測用パラボラ。5は3750 Mc/s用1.5m パラボラ。励振アンテナは円形導波管開放端で、後に4分の1波長板とフェライトスイッチがあり、左右円偏波の高速切換えができる。6は2000 Mc/s用2.2mパラボラ、励振アンテナは円形導波管開放端で、その後にタンススタイル回路をおき、左右円偏波を分離する。7は1000Mc/s用3m パラボラ。

